



「名村テクニカルレビュー」 第23号発刊に際して

取締役 専務執行役員 間瀬 重文

最近の一番の身近な問題は、何と言ってもコロナウイルス感染拡大ですが、新型コロナウイルスがここまで世界中に広がり、生命を脅かし、日常生活を一変させ、更には世界経済に大打撃を与えるなど、大きな衝撃を与えています。長らく、科学万能と言われ、私自身、人類は大抵の問題であれば克服できると信じ込んでおりましたが、新型コロナウイルスの出現は、その自信を見事に打ち砕き、更にはまだまだ世の中には、未知の脅威が存在することを改めて思い知らされました。

我々が直面している問題に「地球温暖化」というテーマがあります。私自身この地球温暖化は、今回のコロナ禍と多くの事柄で重複している問題のように思えてなりません。何故なら地球温暖化も放置したら、地球環境の悪化はますます進み不可逆的なものとなり、気候変動により集中豪雨や河川の氾濫など生命を脅かす自然災害が多発し、同時に根元的な役割を担っている農業や生態系へのダメージなど様々な危機や脅威を引き起こすものであり、更には一国だけでは解決できない世界人類全体に突き付けられた大きな課題であると考えられるためです。

しかしながら、コロナ禍と大きく相違する点は、ウイルス感染は瞬時に発生し、クラスターとなって急速に拡大しますが、環境汚染は時間をかけて進展するものであり、それらダメージを食い止めることや、引き起こす原因、更には対策も明確に存在していることです。

幼少の頃、夏であっても朝、夕は涼しく過ごしやすかったものですが、ここ数年の夏は猛暑と言われる通り、毎年各地で最高気温が更新され、今年も豪雨により河川が氾濫し大きな被害や多くの被災者が出てしまうなど、確実に地球温暖化は経年とともに身近なところまで迫ってきているように感じます。

今回のコロナ禍を通じて普段の日常生活は大きく変貌してしまいました。このコロナ禍を教訓に人間の無力さを謙虚に再認識して、地球温暖化に対しても普段の生活が送れるようにしっかりと時間軸を意識しながら取り組んでいかなければならないと思います。

船舶については、国際機関から環境規制が相次いで発表され、2100年のゼロエミッションに向けて二酸化炭素など有害な温室効果ガスの排出量の削減率が今後段階的に引き上げられる予定で、各社は凌ぎを削って、環境に適合した新たな技術開発に取り組んでいます。

当社としても、次世代に向けた取り組みとして地球温暖化を絶対に食い止めるという強い使命感や気概をもって、新たな技術開発にチャレンジしていきたいと考えております。

最後になりましたが、本誌を読まれた皆様から忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。

今後ともより一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。